第三十回合宿教室　第四日（八月十日）

講話資料

元日特金属工業㈱常務　加納　祐五

一、み濠（ほり）べの寂（しづ）けき桜仰ぎつつ心はとほしわが大君に

といふ歌があります。あまり人口に膾炙した歌ではないと思ひますが、しみじみとした草莽調の佳品で、私のひそかに愛誦してきた一首であります。しかも、私はこの歌を口誦さむごとに、何とも言へぬ一種の情感がひたひたと胸中を浸してくるのを久しく禁ずることができずに参りました。

この感情を、陛下に対する敬愛の情と申したのでは、なほ足りません。み光を仰ぐと言へば高いけれども、一層遠のいてしまふ。恋闕といふふるいことばが、或はあたつてをるかは知れませんが、それを言ふのは、少しく気取つてはづかしい。

ではこの状態をどう表現したら多少とも近いか――と思ひをめぐらすのでありますが、どうも簡潔で適切な表現を知らない。強いて申しますならば――この会場には年少の諸君も多く居られるやうでありますが、私ごとき年代者にとりまして一生（いちよ）の楽し方をふり返つて――襤褸（ぼろきれ）にもひとしい大方の生涯ではありましたが、その栄誉も、悲惨も、忍苦も、つひに挙げてこのわが陛下と一つのものであつたといふ、しみじみとした愛惜の感慨であると申したら、多少は近いと申せませうか。

幡掛　正浩
（伊勢）神宮司庁　教学研修室長

二、ここに言はれてゐる国体とは、祖先の祭りを行ふ天皇を中心として結集した民族的形態である。これは外から強制されたものではなく、各人の胸に内発して宿つてゐる感情である。歴史の中に成立した国民的個性であり、共同体への帰属意識といふ人間の本然の願ひを、もつとも強烈に堅固にみたしたものだつた。

竹山　道雄「国体とは」

三、わが国に於て、天皇が国民結合の中心であつた歴史的事実は作為された人工人為でなく、天造自然の事実と見る他ないのである。戦後の経済再建の奇蹟は、かうした歴史的事実を伝統として身につけた、もつともあたりまへの日本人が一歩に一歩を重ねてうちたてたものであつた。

保田　與重郎「問題の歴史的解明」